安政見聞録

中

ヲ1
3628
・2

門ヲ1
號 3628
卷 2

早稲田大学図書館
25.6.19
購入

安政見聞録巻之中

○両親を見捨て禍ふあの條

諸国地震の物語を少に成共

なるあり。まゝ陸地海中に漏つ。或るハ山崩れ。まゝ川筋の変

平地に水湧出る。是なハ珍らしとするふべし。然るに江都ハ往

古より。かゝる変異あることなし。むかしの都ハ地震

いと稀ふて。往古元禄十六年。大震のありしと受けど。物に記る

せるハ白石先生が折々柴との書に。少しくこと〻て書れしのみ。

ゆゑにども市中のさま。まゝ何知よりなく方へうけて。多く驚し

申紀さべ。さて先生一家の記居。且八代洲川岸へ住んとて。ら

らまゝ不道くの武家町家成く。崩れ抜ゝて街ハ人もゝ。

数ゑどの。ゐるくごとき夢さこゐ。ゑふに人の嘘くまくん。かくて神田橋の此方に到り。門人ふ出舎て馬を備る。夫より八代洲川岸の数に沿ひ。と紀されるのこ。貴下諸方より火ゑどの。起りしとのことも又えび。大震あつて家潰まび必大災発るこ。都鄙とも。にこゐ然り。さまとび。この時も訴くとりして。失火ありしのあらん。白石先生その頃い湯島天神下に居のふ。さて大地震ひ出し。屋舎揺るこ。瓦まび精牙舟に在るごと。ゑ慈まども家を出び。ふ瓦の崩ま落るに及び。こゐ庭に出こちこう。小瓦崩ま落ざる以前。若狭様て地出まび瓦その他の物落て。却て怪我をせるとありしこそ宜なる我遠田の地震ふも。この類ひまくあり。本所に住る何某るゐの。吏婦に女子一人ありて。僕一人を使ひけり。この地震のとき親ゑこ個。こゐ憩こしゐ驚きちゐ起れ。雨戸を

もりきて出んせるに。雷鳴固く頻ふ閃び。貴下僕も怯き覚て。己が非座にある開き戸を。おしあけて近出こるこ。女子い目ゑくことを又かけ。一人を如へ地ゆ出て。その開戸より対面へ出隣の方へ往んとして。土庫の間を通るに。貴下土庫こちまち崩ま。かの顛巻と唱る土の。ばくと碎け墮て。女子が頭上をおにろり。女子い塵へぞ手如へ伏しとき。土死泳が上に落雷ありて。婆も出さび。その侵手如に死てげり。さて手土を取除こるに。女子い両眼飛出し。七竅より血を噴て。うち一遍られるこゐ。こるに気も瞑ま。心惑ひ。両親い地獄の苦しくて。戸の開ゐふ間とりて。右左婆ゑ。但貴下両親い地獄の苦しくて。戸の開ゐふ間とりて。右左もるまふ震い止ぬこふ於て。恙ゐく。元より。その家も潰まざるふ。女子いちもくかの僕が。出るとえて郷導を得て。隣の方へ遊んとして。却て

今て喪ひしいとまく せそる迫たり。僕いとまより病疾きたれのまぐ土産
の落ぬ間に通りて悪ろ。かくる数ひも多くありて各時の然らしめ
一様にいひ似せど。按るに往ふあらび。人の子として両親の惑ふを見捐閑
どの。内ることたんて已のことをりて難て遊んとせしい第一考心の落きなら
ずや。この巻首に記しる。千住の嫁とい表裏。この女子両親の侍にあ
らべ緒共に悪あれを。道まんとして身を迫つ人の居子る者いよく是
を堅むべ

附ていとふ奇しきとあり。江都の近郊上平井い智天宮祭性在
て。都下の老若春秋いとふ歩行をもとびの多く。人のよく知る
所。この北養ゆて裂ることニ町余幅元を二間むかり。深さ数丈と
りを知らい。通民屋この上に在るりのい半こふ埋まるり。況んや

衣類調度の類ひ埋るりのい生る物なり。まこと新吉原の日本堤
隅田川の堤も裂ることもまるまこと。その廣大なるこの俗人力をもて埋
立る北成ひい樂生せ。封疆など。年貢アとの北国まるとのいど
も多く損ぜざるりのあり。この上平井もたのむ。川などを堅こ
あり。但しこの上後に咲くふ。知らざる人も多けれべ。廣大なるい
らぎりしろ。行程さのこと遠きふあるれど。行て看ざれべ。伝聞いとら
べ。但是をりて上古と致ふるふ。日本紀天武天皇七年。筑紫の國地
裂ること。廣さ二丈長さ三千丈民屋多く仆壊こと。この時ある百姓
家園の上ふ在けるぶその園崩れて廬遷る。然れどもの家い全し。
家に在しものこれとそ。疾病て亡れと祝て大に笑くとのこ
同十二年の冬。北魯して已崩れ。殊国寺塔舎屋破壊して。人民

六畜多く死し。伊豫の溫泉沒して出ず。土佐の田苑五十餘方潟
となり沒して海となる。この夕べ雷あり。龍のごとく東に飛ぶ。伊豆の
海の西北二面自然に塔益をなすこと三百餘丈。さゝに一ツの島となる。
龍の如くなるハ神さの島と造るなるべと云云。こゝを以て古代あれば
その書を觀て識るのと。寛政年中吉岡元稠と云る人の著し
る。由の梨との書に載る。蟹麻呂出来島の條に逆一年摂津國西宮
豊臣の摂津大燒の後その海中俄に沸騰して海水湧上り。海面
に火燃出で。大海の水こゝふ湯となり。海中の魚類大小
の差別なくこゝに死せ。その海の沸騰する勢ひに乘じて百尋に
跳上る。海底より土砂沸上り。新に七ツの島と生ぜり。その第一に
大きなハ一里七合廻り。その外ハ一里ばかり。或ハ一里ばかり。後海

中の奏繰りて。彼島うこまりて玉土となる。始めハ島に草木も
なく。滿面白砂のごとなりしが。何方ともなく草木来り植なりて
草木次第に繁茂し。清水を湧出ず。ことに周て潤沢より。
新潟小賀居を建。家守を置わしたべ。糸魚の人もあり。頗てモ
人ハ住居なくこゝ。この樣なる書老二年。この海燒て天地晦冥
し。夜の間に周圍七里のうち山出て樣なと号く。此海今
ハ人民多く。田畠も拓き。饒し。この海の外二ツの小海あり。ことに文
治年中の比出来しとの比なるふ。是等のことハ信ずるに信ぜざ
るの事あり。さてども奥き世界のことゝのこと經ぐ。所
蘭陀より日本へ来る海中一大國ありけるゞ。先年海中に流入し。
今ハ海その島にあり。その島の顛二ツ三ツ所く海西に出沒ハとの所

に出来る為あるべし。まづ沉ぬる迄もあるべし。夫れの機関のつゝ
とせん。まづ地震に拘らざるべし。緯の帛にとゝ謝言に

○地震によりて庄屋の肉を脱する條

古人のものゝ。元そこ軍に招こる者。小崩るゝとも同時ぶぜ。
藥鹿前に進むとも。更に恐懼のもなくして。以て軍を指揮すべし。と
とも他の心を動ずれば。胸中昏瞑して緒計の妙らざるを減一
むなり。常人かくの如くなるべしとゝ。平生ことを心にうけて。物に
感ずるも急にあるべし。よく計らひを丈夫とゝのべ。その心がけ
ゝに魂身をたまはして前後を失ひ。後悔おくるべき物なり。譬へば
急火の時に線こそ。所要の物を捐或ひは古下駄帯の類ひとも
小酬て火を避るあり。とは強執ふ心熱ひて。手本末を失ふなり。

中ノ四

ゝふ貪欲の者なりとも。古下駄に勝る。家財ゝ人や。ことを
急とそ用に綱ゝる。義物を先にするとゝ。魂をふまゝざる故なり。
されば大学にもことを数へて心焉にまゝざることをば入ることもえ
難ども。ゝえも。食へども味ひ。知ずとゝ。悅もとゝ。まゝ恐懼
する所あるとゝ。その正しを得ずとも。えゝ。こゝ深川扇橋の
ゝゝに幽なる活業して世を送るものあり。のと。かすけさ儒屋
に居るゝ。然るに這回の地震にあひ。淡きそ外方へ近出んとゝ
時機の上ふ汗物落ち。股のあゝゝを挟まれて出ることを得ず苦
しく居ゝ。折かゝその隣家及びにきのゝの外方へ近出ゝ
置ゝと安否を問ひ訪ゝ所ふ。この男妻をあげて投げ行ことゝ
叫ぶを聞。こゝを近よりて出ることを得るに胸ゝとゝ外にまゝ。

股の骨より。接まれてあるゐれば。救ふい容易き事なり。と忽ち七八個より集合。かの男の前後を抱く。男もとやく脱まんとすれども。人々の力と究めて。海大勢のつきぬ如にまして。人々に拉るゝ。人々の力と究めて。海大勢のつきぬひりそ。矢庭にことを曳出しけるとて。曳ぐ。たゝ船ふ接まれて。木の接服ふ咬ひ入けるとて力に任して曳ぐ。たまゝ服ふ見の中にあるび。肉へ彼まて彼方に残る。さぐ白骨のみ。蛸ふあるて。血の流るゝ滝のごとく。嘯き苦しむと大ゝとなるゝ。千妻子もあるけるとも。助ふ元とも歎び。近よるにこの辨ふ更にまゝ残き呆れて。ゐるふとも術をもゝび。かの救ふ人々も只管に呆るのみ。絶やうのあゝざるとべ。まづ手ふ出へ曳ぐ。怪我人を救け救て。医師よ薬とゝ煎げど。何方も強ぎの

中のゝとべ。薬も治ぶ医師も来ぶ。うまゝ医師の来るとも。ことを療する術あるべきや。かゝて怪我人の指めこそあれ。粥くに浮漏を覚えて。犯ひ叫び逡巡もて。釈氏の方便地獄変相の図に画きゝる。到毒焼熱に苦ゝる法もてあげて。頭ゝふ臥西を指るやどに。殿に深ざる所もゝる。月裏にさへ別ゝあれまで。鬼ゝ人をと紛ぶまゝ。仮初に見る婦女子等ハ後さ戦慄ざるものゝ。かゝてその次の日に犯ひ死に失ゝりけゝ。こと指めの業くゝゝ心ゞ子のゝ元にゝゝ。簡粕の粥ゝと仕出ぶ。千妻人ハ見邪を傷せび。救ふとて寄ゝる老七八個のそのうちふ簡汁の一心著ざる。愚人のゝふいあゝざるべけとど。その多も大義ふ忍懼のまゝ心元に渡さび。頭ふ周章慌くまゝふ前後

きてで逸早く奥出さば。助うゝんとのこゝろざしなり。千四百人で一個の
と願るものありて遠あらんことを祭り。落る枝を揚へるゝ。その数十
人の賛力をもていとも容易きとあんを。ときふ心の美しゝ。一支
を若死せしむるハ。歎息に堪ずしとのべ
按るにことふ限らず。一心用章擾はゝきハ。オ力勝こそ働べ。
故ふ湯を以て沸を止めんとす。薪を抱そ火を救ふの。拙策なる
ことのゝ。されば幼おより学問を勧め。和漢の先哲自他の功
失りうる者意の情に在ても。明ふ深むと智者とのひ。英士とも称
べきゝ。用て余平生に。前を平定に載る所。夜川の柵砦を安
倍奥任単騎ゆ。敵兵に及びしとも。義家朝臣矢と書ひ逐ふ子
あゞゝに荒こふ「衣のゝそふ結びふ子」と貞任ことを領こそ。年

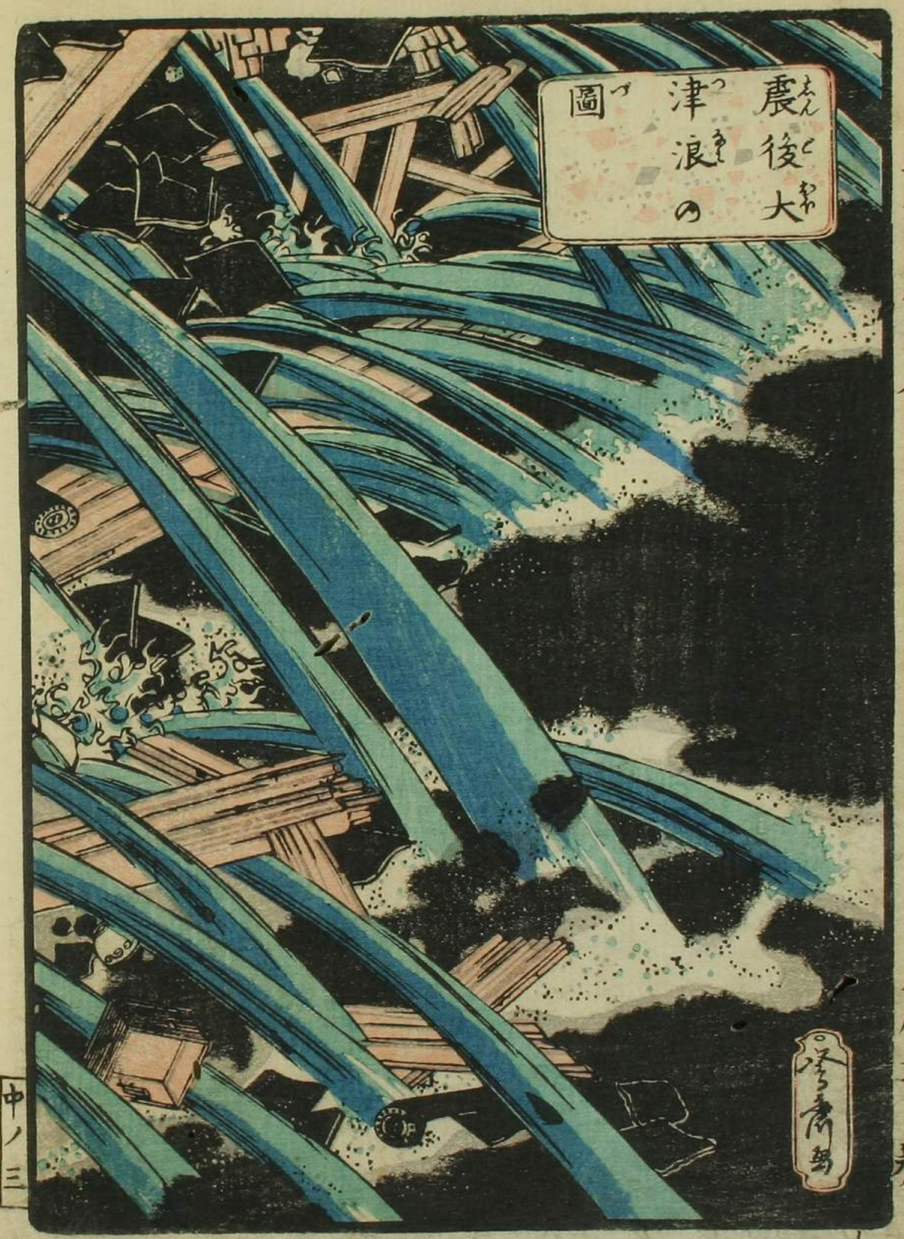
を終へ一条の乳母の若ゝさふ」と附こと。義家感ず。その志を優ー
し慶て。書ひる矢を池め。手まく逐ふ。べしとぞ義家ハ勝軍にて。
心も勇こ。ちのうふ。優美の大和に生まれ。簡汁ふのこゝろ
然もありうん。貞任脱に柵を破らもと心ふ忍柿を懐くのなり。
この一矢を放るれば一命手効ふ絶んとも。この期ふ及びて心擾
きび。業位那妙の句を嗣こる。実に英雄の域ふ入らぎふ。
てなりゝゝこに業ゝるべー。ゝ寛文元年月十五日。糸師大大ふそ
大内ゝび。ゝ卿の茅宅多ゝ焼る。ちのこに清水谷大納言。風
早参綾ゝど。ゝゝふ火を逐て神吟の。道ゝそゝと行あハも
ーに。清水谷こを」をうて「風早と吟もあそうゝふの火や」とす。
ろに言ゝ子のゝひーゝび風早参綾ゝとうあへ〳〵「清水谷」とそ焼も

残らずとし對へて立別れぬひしとぞ。公卿ハ常に歌道を学び常
住坐臥ハ忘るゝことなく胸臆にあるをもて。かゝる騒擾の時にも容
易く綴りなり。常に心に存ずして平生の折ふ綴ぬべき。されバ
萬事常々の心得にあるべきことなり

○流言を傳ふれバ禍を招く條

余が知己なる人聖天町辺に。下駄傘など商ひて。夫婦と下人一個を
召仕ふ者あるに。この夜地震にあひ。且その近邊猿若町より出火して
焼廣がり。既にかの芝居町残らず。僅五六軒。表田町辺ハ焼残れ共。火
を遁まじと。其夜焼亡に及びしかバ。煽八方に飛散して聖天町
邊ハ小家のことなれバ。火の付る心地なりしが。彼下駄など商ふ雄士も
宅を走り出。夫婦手を携へて。門のほとりへ立出るが。その近邊の人

も。皆舟にうち乗りて向嶋へ火を避る。この夫婦も続て舟に乗ら
んとて彼処へ行てあり。待る間の方に居ふれしまで。其夜を明しゝけるが。火
ハ大ぶ残りけるも。わずかの家も焼つくさんは誰とも詮なきことなりける。
若狭様など遺つてあらバ。拾ひきてんと思ひつゝ。まさ舟にうち乗て此
方の岸に揚りけるに。芝居町裏手のくさ聖天町の西側へ燃え出
されど彼雄士ハ東側なるによりて。煙もからきことなるまでありし。夫を見
るより又さ更に家を捨ひし心地して。我が家の門に入りて。箇様
て住居のあらんと知らバ。銭箱なりとも持出さんを。余りに煩
の急なりしバ。周章て身一ツ逃出しつるも。あづく銭を今ハ大
ふく残てなく。織の為に奪ハれぬらんと後悔して戸を引あけ。
裡に入りて右の見えるに。宵に出たる時のまゝにて塵もなかりける


震後大津浪の圖
雪齋

りの日失び。遠い紙ふ不測なり。元亨間近く大災あり。猪猴て
逃ること六。僥倖にして焼残るとも。家紙の大半城のごとに。倫
まるてりのと少く。怨るに実別の地震より。今已の刻ふ及べるまで。
縁りもあるべ人も居ぬ。家ふ在る物の失ぬ。実に有ざる
君ぶ代の。四恵こを尊とけ。然いあとどもたのむ。聖代くと
称へる。延喜 天暦の帝世ふ。悪人い絶えびとうん。されば今の
帝世にても。邪心のあるものあるべ。然るに竊盗を猶の族も。命惜ぬ
者のあけまべ。この大番に忍姫にて盗を心も失ふ。あるんとかの雄士
へ縁つあれ。たまとり法も行揺ー。の未らんことを慣まつ。已ぐ家に
卧をものあ。月中こをあまと落着うり奏き所に仮屋を補理。こを
張りあるこを出て。夜を明さん者もなけまべ。市中表裏明家と成

中八八

て。こまと獲る人さへあるれど。盗人徘徊せざることえて。何方に
ても物一箇窃まれうとの人を少び。場所によりてその仮屋も。三
町隔ちーあり。まこ実よりも程近ある。方いあまども。絶に手門
きこに在にあるれば。夜の名ふ来り。恐ふ家残雛具を奪ふとも。誰
外なるものもるを。彼家毎にもるい実ふかの雄士がのるどく。
紙等も恐怖せるべ。使まとより記日を絶て。六日七日のひるより。
今夜かるべ津浪ありて。苦る猫いのこにあまず。大川にも通り神
田明神の坂下まで湖大ふ来るべ。と。誰いとうく流云。代代恐懼
に魂ふ。ふに剛ざる人く。是と少より前後とも。ろひ側らで猿き
て。虚て汲て虚て答ることふ方て。智のふ人婦女小児の輩い恐と惑ひて
力に怯ふ資財を負ひ或い荷ひてるき方へと立さるよ。義千万とい

と知らんと。遍智量ある人の変じてさるべきことあるべきなり。心を安んじ止まれと理を説諭せど、深き迫時の勢ひ制しがたく、閉て家門悉く立退くりの由、鮮なるべし。然るとも秋てるみ。麦下肇て浚るべし流云るべんと半覚り。悔やこそかぐべきも帰り。つまびらかの宮ホ資雑具奪ハもとより方も多くあることぞ。ふ祇園の姑め人く仮屋に在り。空く迫りと遺憾に思ひ巧こそ箇相の流云るべ。人の立遊ると窺ひて恣ホ竊こしるべ。見苦のこも縁なりとて心に恐れてのるる変異の風説ありとも。その理を熟慮し。実偽を篤と攻へて。その言に惑ハざることを才知ある人とのそめ元て津浪ハこの本の首巻にものいるごと。地震によりて海汀の游泥涌きよりて黒浪をもて暫時陸へうち揚ること。喻へば盥に水を活へびとりてことを揺動るに。後けるとの水の揺

中ノ九

るこもまた後しこつて刻しく動るを時ハ揺るこもまた烈るこそのの水盥の外に溢るを近る威勢ハこを彼津浪と同理なりされば大震あり已後に八日を経て海水の汐るべき理なし。その理なけるとそのの事あるべこをとりて偽の流云るるを禁ずべし。さるを見程のこ浅智愚蒙の者とのもど知らざることるし。但麦下懼るこの志しけるとの智眛こそ。かく沛然きるもどふも禁知せざるのるん。ま況ハ推ハのるるく。今春ハかるるべ大震あり。翌ハ極めて最初に勝る大地震ありとのひ異ハ。余ら知已ホて事にハるく。物を禁知する士人ありしか。このことのひ出て天ホにるし人とりてのそしむるの事云あり。この須臾夜とるく微動あり。加稱に方を膝ちホ勝膕として晴やるるべ星の色も異めくこのふも地震の兆を含むこの風説も根なしてふハあら

ざるべしと恐れて語る。然るに其の外へ出でに鄙人の云ふ老媼とのこと
に個集りてこのことを語り居るに。一人の老媼がいふやう。過日大地震とのこと
い。何人かのひ出る彼しらべとのひけまへ。今一個の老媼答へて。開い天文ふ
精しき人のひ出るとそうん。油断まべきふあべとのへべ。まこそ老媼冷
笑ひいや天文ふ精しとも何をりてこまて知らん。偶微ふ識しるふ。実為
ちまこそよ
ち最初のこれこのことをいまずしてもくの人を迫せ。元にさらざるとこと
まを語りて止ふ。余傍にこまを。この老媼を智蒙昧の鄙人とのえ
るべし。彼士人ふ競ぶまべ識量大ふるうけつと微笑してをしてとあり。
然まべ人の一言半句のこれにより識量とも大くを来せるるものと余が
先年若しる虎しと瀘馬とが競のごとくふひ合まべし
按るにこまに限らず。或ひ大雷或ひ大火まべて人の恐懼する。

時にあらてまこと何時幾日。まこと大雷大火あらん。これ神の託宣。
亦某の社の巫現がトたし所くるど。貴くもくのひ罵まど。その後
あまこと。然るに是等の妄言を伝ぎる人法てのもくこの託宣ある
により。何方の名称をまを祈つて。天雷を遠ざけうり。まこと大災ハ
人々の心を苦て獲つしめ。是にこの雅を脱まこと。このひりてちやに
人も多し。是等の人ふ年ひてに右を費まハ。早竟之益の所為
るべし。試ふこまをのそ雷ハ陰陽の撃まる処。祈るとも何ぞ
逃べき。但菅神天雷とるりて。系所ふ裏んとなせし前叡山
にもり法性房ふ。ようや勅ありとも祈つをハ。是等之益へ
率去の涙を右にあらざるし。勅命下らべ年ハ。祈らべ
を得んとのへべ。菅神怒りて手知にあり。板橋を取てに合。

侍る杉戸に垂ける。柘榴忽ち火焔となつて杉戸燃人と
なりけるを法性房戸を結びとまを結めうとしたるの元亨
釈書に又えて人のよく智所。但信偽ハ解しがたし。かまび名僧
天雷を祈るとなりとのべうらび然まどもこのゆへ古人も多く強
現をえて稚くふのひあり。まと人くの護りにより火災あらびと
ハとも。で一意の理とのべし。然なくとも失火ありて家産を失
ひ花けきハ命を失ふもまたまび人として火の元を護らざる者ハ
とハども時として大火あるハ実に天の命救ある元明の謝繁潮
が上元の燈の條に火災ハ自命救あり。士女の遊観ハ先年の事
云云とのひしをとして参ひべし

○地震の前後地脈和ふの條

あるを大地の気和ひ陰気上ふありて陽気を閉まと。陽気まと下
に伏せび。発出せんとするにあるびて。地あづうう脹まあるを。資俗を
炙るごとくなりとハ既ふ前にも論しうり。かく地中動くにより。地脈
あのづうう和ハなり。因て井の水或ひハ湯。ある時ハ減じて常にかゝる。
こふ去年十月二日。大震の前ようしうび。浅草四箇前に福田屋と
ハ。水茶屋のありけるゞ。駕に乗りて来る人あり。轎夫庭を徘徊
るゆゝ。凹こゝる所あるを。何心なく杖にて突に。忽地清水滾こと
湧出て流まければ。旦人とまを又て大に驚き。立よりてみの侍を穿
ふのよう清泉湧出まび。人くまを奇なりとして競ひ来るの市井
わゝ。旦人ハ桶の底を抜き。是を覆ひて井のごとくし汲とりて多く
ぎるに。その味ひまこと美なりこと又多く人毎にて不測のこと

とのひて。尤脈の相ひーに心ハ著び。然るにをとよりにゆ日を過て。
大震あり一なり。そ後諸方の風説を聞くに。あるひハ井の水ハ
ハ。通きと半に過ぐとのひ。まと遠きと倍ゝとのこと。を以てを
ふふ。尤脈るひそれ乃の。差ひぬると能ひなり。されば福田屋の庭井
に。暴ふ清泉の湧出ーも。茂に尤震の前兆あるべー。余近ろを水
をうんふ。青く濁りて苦を生じ。ろ〳〵に飲ふ怪び。是よりまと救用
を絶ばのふふるらん。知るべ〳〵び。

同ふのこの時にあとり。安房玉の海渡潮干ること。常に競ふび
こ倍せり。故に汀ふ遊ぶふ児等。歓びてその干潟ふ出て。砂を穿
ちて貝を拾ふ。遍ねき殘りる潮の中に。鯛鰈あど躍つてあ
きび。これをとうんと若りの多。こまこの干潟ふ多り。奥を捕

て俗者の。然るに一老人とふ来り。金銭ふ出よ。さなくハ
命を奪ふんと。奪て浪へ投げ出び。千枚ハ新ぐされど。老
人の呼ぶまふ。こまふち連て山へ出り。ろ〳〵とうとび形遽く我く
を呼びーと問ふ。老人回答てされびーよ。已若きーとその後の潮
大ふ干ることあり。必ふ今月の宵に然り。事に稀まるとま
出べ。こまふ歓びて干潟に出。貝を拾ひ奥を捕。大に奥を儲ふー
ける時潮暴に逆巻来り。干潟にあり。ものの一人として。一命の全
きのこと。その躰をさへ遺せーのなーと。是所謂津浪なり。此
津浪来んとするとき。潮十分沖へ引た。その来ることハ猛烈に
て。こまを遁るふのこと。ふ。老人ふーくとまうーけるが。その個で
まぐ終られ。漢のうこと。三里にあり。数十丈とも量りがた。

己のごとく潮逆巻逆りて岸を浸し。その浪殘教町を殺て。己の
縄を繋ぎたる舟。矢地ふ舟きて怖しるどの人紐もるとなり。号
とえて美老い大ふ嘆き悲まり。りこの老人なり世べ。系海
底の水屑となるんを助けら是ーで泰ゐれ。と老人をふ一緯
ゆり。と成人の結りゆれ。と是蚫蠖の伸んとて暫時屈まると同
一理ふて。海潮暴ふ退くとれ。まと暴に寒ーんを系ー。
雑を遊べきなり

又ふ余ゞ友の紀巳なる人所用ありて系沖へ登りーふ。系永七
甲寅十一月五日。帰路にあらう。桑名の海を航とけるふ海巻の方
とえ見べ。七の舟ふ沈えなど。並松ざふ〳〵とふゞ〳〵。投うち更い
して動くなる。什麼大風ふ吹やとあるへど海上ふ穏なり。投に舟あり

組の者ふ系弥りて一同にとまとるふ暴ふ濆の方を思くなり。
今ふ方も又えいなる見べ這いりるる怪異ふ〳〵と驚き必ず
者もふ。豊下紀長寝にのみやう。是ふ必津波なり。ゆ遁ふ
ふ道なけ見べ人〳〵覚悟しのふ彼人ゆて大ふ懇ーとふ。りふ
ーてうこの雑を脱ふて脱ふと思〳〵べ教てよ。とのふ紀長臥とふ。変ー
て是を脱見ゞ〳〵。で天命に任せのこと養へて彼方を偉と元
る。彼人今ふと是までなり。と所拾ふ物のうちりと貴く大切
なるを腹ふ括りて覚悟ふ手。折〳〵潮満〳〵ゆるもて逆浪の。
うち返ふと系所ふ。系ふる紀底逆浪の発まる音ーて二三丈
紀ふ虚空へ内めき升り。暫くして擂と落見べ。まと逆浪ふ
せられて。升ると初めのごとく。かくすると次上五度。紀中の人ふ。

宮の津ゟ
旅人津浪を
懼る図

流るる心地なり。暫らく如く流るるごとく。傍て観音の堂
など称するものあり。程なく海上穏かなり。船僚伴に語る。向
の岸に著けばべ。船中穏生なるべしとて。悦びあえり。
かくて熟田の澤に上りぬるに大地震ゆ。家いえ倒れ
揺り崩し。或ひは梁棟に壓され泣叫ぶ男女の委耳を聞きぬ
臆に慮ぶさえいとの地震によりて海上浪せしものなんと思へ
怖ろしかりけるが。今この害を免るに及び。かゝる憂目に遭んより。海
上に在しこそ。遥勝りしー洪福なりきと自らの身を視しかど
近けばべ熟田ふ縋て精性さえを祈らんと踊を拝てかの社へ縋で
けるに不測なるかたの程僅八九町の傍にして。宮居ゆ
しも損ずることなく社壇に拝し地祇の大きえ洪恩をあらびる。

実ふ神恵の貴さを心ふ徹ぜて感涙を流し。暫時祈念してこゝ
去つ。まさえの沢ふ出。そもより次第に下りけるが道筋をべて保
泥を吹出し。泥を辷りて歩むえふ人家ハ一宮に倒れ損じて。
食を索むる家もなく。舎るべき方もなし。江都までハまだ遥け
きふりふりて側り苦んと思へばいよ〳〵心細くて。身の力ふ抜け
てうり右左して漸くに仮て索め疲にあるべ崩れ殘つ家に
舎り。辛うじて府ありけりとぞ。手道もぐ〳〵難義せし物語の
多けれど。繁き故にてあへ略せり
この地震のとき余が知己なる中山何某とのへる人遊歴して浪
に居たり。この人海道ゆて別て地震の厳しと聞りこの日已
刻ごろ中山氏。外の方にて出て。人と物語り居けるが飛来

震よりいづるもあらバ。両足痿て㒒と倒れ。起あがらんとすれば
れども。かの小児が戯れにする傀儡びとりに斜〳〵ぶら蹣くことし
て立と雖し。家下泥中より洞のごとく沙の吹出て。満面を
打るゝなどハ。目ハ口ハ用きねバ。心昏瞑して前後もしらズ。漸く
して揺静まり漸く心地さまれ返り。起上りて四辺をみるに。家こそ
斜しく崩れ倒れて在しか。容ハ似もつかず。四方ハ人の泣叫びて。
一ツ生きながら叫喚地獄へ堕しものゝごとくおもはれ。心を静めて篤
と見れば。家も崩るのところ。二尺ばかり地中へ陥り。衣類調度
も何方にあるか。屋根瓦崩れて震ひぬれバ。頓に出さんやうもなく。
只管に呆れ惑ふ一圓秒のごとくなれバ。一夕の米もなくことさら炊
く器さへこの地中に埋りて。いかんとも詮方なし。殊にこのさき

の井倉崩れて。住宅崩れざるも泥吹き入て更に飲べきやう
もあらねバ人々飲水を断れたり 〇余ハ江都の地震ハ潰しけれども。家々の るもあらバ。但し怪我人の他方より贈りし土地
●不入の多きが中途のこと かくてその翌日に到り。邑の荘屋諸方を募り。漸く下
て来て渇つ。粥に煮て施しければ。始めて喉を潤せり。その中山氏
もその翌日。粥を啜りしハ未刻なりとぞ
本の頃彼府に居りける余が親族の僕由蔵なるもの。此地震
のことを語りしをきくに。破裂地震とりいふ程こそあれ。蔀格子も
ことごとくにめりめりと破れ損け。戸障子倒れ椽さへの束柱一時
に倒れて外に出んとすれど足も立ざれバ漸くにて這び出しが
震ふて裂しけれバ傍にある大木の。やがて一抱もあらんとするに
抱き著しに。その大木の幹大に揺はふよりて。手を放さるゝ

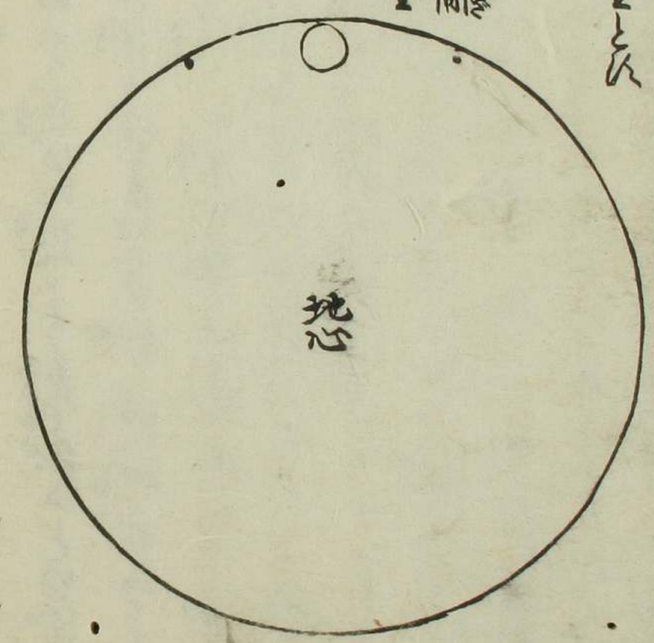
甲寅の十一月
駿河の國大地
震により泥水
をふき出せる圖

こゝび宜ゐるゐこの大木揺まして。伏せそとゝいへ枝地上に著き作へ
とゝいへ半天に至ほ。故ふ返てこの幹ふ折るまゝ。分解微塵ふ成
ぬゝり。その危ふき殆ゐるにものゝ。然るに之運にして。その遭
たゝと得ゐり亜に地上に將びゝりのゝさゝに起上はを恢つぞ。
麦下大地大ふ裂て。欲泥沙をふに生せゝ。遍分泥に塗まて面
目と分こぞ。震止てやゝゝに起上るとゝのゝどゝ。こゞ眩暈て
行歩かるゝぞ大に躓る人のごゝ。然るに如よそ半時ばゝりふ。
揺返ゝの来ること。初めふ競ぶまゝやゝ緩来ゝ。夫より時こ刻ゝ
ふ震ふと数を知らゝ。因てゝ都の地震。さゝも猛烈
なりとのゝど。後府の地震を十分とすると。七分ばゝりゐや考
ぬゝんゝと怖ゝたゝなりと伝ゝき

○地震の方角とゝ條

凡そ地震まる時にあゝり。或ゝ東より震来るとのひ。或ゝ西より
来るとのゝ。南北もまゝ然ゝり。さまゝの記る所。何方あゝんとなりひ
慮るゝ雷のごゝく。ゝより発して。里を裏ゝ内のゐゝあゝゝ。古書に云ゝ。
地球一周九萬里。と是廣土の説なゝゝ。六町を以て一里とゝ手ふ
るゝ。是を日本の一里ゝ十六町ゐて。一周一萬五千里とゐる。さまゝ考
地心より地上まで。二千五百里に当るゝ。然るに和漢古今の地震。
むけき考ゝゝゝ。その当の甚ゝる所。大抵二百里四方に過ゝ。遠国に都
の地震あゝゝ。百里四方にもゝるゝ。この廣大なる地球に於て。この
ふゝる地動のゝき。東西南北より来るにあゝゝ。震ゝる所本ありて。夫
より四方へ響かせゝ。七の微動の所ゝ来ゝゝ。今試ゝふ次に図も

こゝを地球ゆゑ周廻凡そ一萬五千里ゝとそこの地心ゝとある所より
まゝ三千五百里ゝとゝ



右ゝ図するごとく。二百里四方ゝと裏ゝ大震い。和漢古今にあるや

なゝや。その大震ごとく初めのごとし。況やその微なるゝ於てをや。前ふものゝ
ごとく。その地に起り。そゝより四方へ響くゝるとゝ。来まる方角のある
ごとく。但その心ゝ強く。その端ゝ次第ゝ緩し。之ゝに今般ゝ都の地
震ゝ都を心とゝすゝめし。その中にても浅草より。本所深川を心
とゝなし。山のゝ手ゝ市谷牛込大窪の辺ゝを端とゝ。ゝ都ゝ元地
震稀にて。元禄十六年の大震より。百六十年ごろを経てゝ。初ゝ
ゝ人きゝにゝる。云伝へゝごとく初めるゝの驚し。ゝで繁華の地なるゝにより。大
災ゝ往古より変くあり。因て大ゝて防ぐの術ゝ。人ゝ安堵に心を移れ
ど。地震のゝゝ心ゝ用ひず。因て遠田の天災ゝ。死亡の者ゝ多し。
少く。是より以来心ある人。家作及び住居の地。よく擇ぶゝ肝要なるゝ
安政見聞録巻之中 終